



今回は、2年6組1班によるフィールドワークの報告します。

◇ 公園のトイレを訪問し、トイレの現状について学びました！

日 時： 夏季休業期間

訪問先： 近所にある公園のトイレ(関市内)

内 容： トイレの写真の撮影

参加者： 加藤遼太郎・五十川凜・櫻井陽太・廣瀬純聖

◇ 公園のトイレの現状は？

現在関市にはたくさんの公園があります。僕達が訪問した公園は6箇所です。そのうち公園内にトイレがあった公園は3箇所でした。そしてその3つのトイレは清潔感がある、とはいいいがたい状態にありました。

トイレットペーパーが設置されていない、汚物、トイレットペーパーが散乱しているなど、清掃が行き届いていないトイレがありました。

また、水道の凍結が心配されるため、水道を止めてしまい、用を足した後に手が洗えないという危機的状況に陥る可能性があります。

公園のトイレを使用するのはトラックの運転手や公園で遊ぶ子供が多いと思われますが、小さな子供が使用する以上、清潔感を保つ必要があります。

◇ 私たちの感想

この頃は使用することが少なくなった公園のトイレですが、よく使用していた小学生の頃を思い出すと、清潔だと言える状態ではなかったと記憶しています。使用しようとしたら、トイレットペーパーがなかったこともあったと思います。

公園のトイレを管理しているのは市町村ですが、毎日掃除できるわけではありません。

誤ってトイレを汚してしまった場合は次に使う人のことを考えて、せめて元の状態にもどうすべきだと思います。

自由に使わせてもらえること、管理をしてくれている人がいるということに感謝の気持ちを持ち、使用するときは少しでもきれいに使うことを心がけ、来た時よりも美しくなるよう掃除をするなど、自分にできることを進んで行うことが大切だと思います。

6 安全な水とトイレ
を世界中に



今回は、2年6組2班による LGBT についてのフィールドワークについて報告します。

◇ 関高等学校 さくら塾に参加し、日本のLGBTについて学びました！

日 時： 2018年 7月1日(日)

訪問先： 関高等学校 さくら塾

内 容： 日本の LGBT について

参加者： 久野隼平 角田健成 田邊琢也 椿勘吾

◇ 日本のLGBTの現状



2017年3月、日本政府はいじめ防止基本方針の改訂を行い、LGBT生徒の保護の項目がはじめて盛り込まれました。これに先立ち、2016年には教職員向けに、LGBT生徒への対応を記した手引きも発行しています。

しかし、実際はいまだにLGBTに対する差別やいじめがあるのが現状です。また、異性カップルと同等の権利が法的に保障されていない点も課題のひとつです。

2015年に東京都渋谷区議会で、同性カップルに対し結婚に準じる関係と認める「パートナーシップ証明」の発行が可決されたことを皮切りに、いくつかの市区町村で実施されるようになりましたが、いずれも条例や要綱での実施であり、法的な拘束力はありません。例えば、同性パートナーへの遺産の相続権がないことや、レズビアンカップルやゲイカップルへの生殖医療の適応など、法的整備や受け入れ体制が進んでいないことも大きな課題です。



◇ 私たちの感想



SDGsのロゴより

私たちは、現在の日本や世界の LGBT の問題について調査しました。そして、その問題について話し合い、どう向き合っていくかを考えました。その一環として、さくら塾や若草へフィールドワークに行き、LGBTの方々の苦労や経験、こうしてほしいなどの願いを聞き、自身の考えを深めました。私たちが LGBT の人々は「特殊な存在ではない」ということを認識し同じように接するとともに、彼らの考えや気持ちを理解することが大切だと思いました。そして、こういった考えを広めていきたいです。

今回は、2年6組4班によるNGO団体へのフィールドワークの報告します。

◇ 日本国際飢餓対策機構愛知事務所を訪問し、飢餓を減らす方法について学びました！

日 時：2018年8月2日(木) 11:00~12:30

訪問先：日本国際飢餓対策機構愛知事務所(名古屋市)

内 容：飢餓問題の対策

参加者：長谷川友美 棚橋愛梨咲 下條叶登 幅郁斗 菅原彰人 山田昌和 佐藤駿磨

◇ 飢餓の理由とは何か？



確かにそういった『体の飢餓』といった面もあるが、それだけではなく『心の飢餓』と呼ばれる精神的な面も持っていた。『心の飢餓』は取り巻く様々な環境の影響を受け、徐々に慢性化していく。その環境には、我々よりも若くして働かなければいけない貧しい家庭環境や、その働く現場などの労働環境、水不足や技術不足などによる不衛生な環境など、非常に多く我々では考え付かないようなものもあるだろう。また、『体の飢餓』も上記のように整っていない環境から生まれるものである。



私たちに出来ることは、小さなことでもいいから一人ひとりが自分でできることはないのかを考え、実行すること。その意識が問題の解決とはいかなくとも、縮小や多国間での議論の話題となり、より大きなステージで解決策を模索することを始められるのではないだろうか。おそらくこの問題はたかが高校生が解決できるものではないのである。しかし、我々が問題を提起しこの問題について考える人が増えていけば、徐々に解決していくだろう。

◇ 私たちの感想

私たちは、今現在の日本や世界の飢餓、食糧問題の実態を調査しました。そして、その原因に基づいて世界の飢餓問題を減らす方法を考えました。そのためのフィールドワークとして日本国際飢餓対策機構愛知事務所へ行きました。そこではかつて行われた飢餓への政策や、簡単には解決できない課題の大きさを知りました。しかし、私たち一人一人の小さな協力でも飢餓問題の解決へと繋がるということもわかりました。自分に出来ることを行い、それを広めていきたいと思います。



SDGsのロゴより

今回は、2年6組5班による加茂野交流センターフィールドワークの報告をします。

◇ 加茂野交流センターを訪問、訪れた人に聞き取り調査を行いました！

日 時： 2019年8月16日(木) 10:00～12:00

訪問先： 美濃加茂市加茂野交流センター

内 容： 感覚過敏についての認知度調査

参加者： 福富千陽 兼村明香里 加納翔太 亀山隆一郎



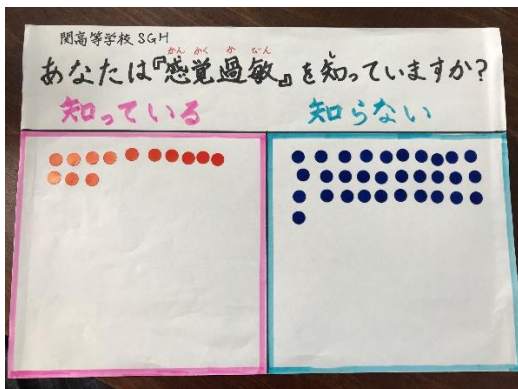
◇ 「感覚過敏」という言葉を知っていますか？



感覚過敏とは、聴覚、視覚、触覚、嗅覚、味覚などの感覚が一部だけとても敏感になり、必要な声や音だけを選んで聞くことができない、軽く触られただけでも大きく体を引いてしまうなど日常生活に支障をきたす様々な症状が出ることです。個人差があるため、その症状を持っている人を見分けるのが難しく、生活するときにそのことで人とうまくかわりあえず困っている方もいらっしゃいます。

今回は、「感覚過敏」という言葉がどれくらい認知されて

いるのかについて加茂野交流センターで調査を行い、写真(左)のような調査結果が出ました。



◇ 私たちの感想 ～感覚過敏をめぐる人の進歩～

私たちは、「感覚過敏」という言葉を広めようと研究活動を行っています。感覚過敏は認知度が低く、感覚過敏の症状を自分や家族だけで軽減できないときに不便な生活を送ることになります。

感覚過敏の症状は周りからみてすぐに判別できるものではありません。私たちにできることは、

3 すべての人に
健康と福祉を



「感覚過敏とは何か」をより多くの人に知ってもらうことです。このSGHを通して、私たちも感覚過敏についてよく知ることができました。「感覚過敏」がインフルエンザという言葉ぐらい広まることを期待しています。

今回は、2年6組6班による関市街フィールドワークの報告します。

◇ 関市 本町通りを訪問し、地元の現状について学びました！

日 時： 2018 年 8 月 13 日(金) 8:45～4:00

訪問先： 関市 本町通り

内 容： 地元の過疎化の原因

参加者： 鷺見 将鷹 阿知波 颯人

◇ 地元クライシス！！ ～地元の課題とその現状～

関市本町通りは、伝統ある店が立ち並ぶ歴史深い町です。その歴史は、江戸時代までさかのぼる店まであるほど。しかし、そんな素敵な町がいま存亡の危機にさらされています。



その主な原因は「若者の地元離れ」です。

それにより、訪れる人が減る、人口が減るなど、また、本町には何代にも続く店が多々あるため、若者がいなくなるとその店を継ぐものがいなくなり、店を続けられなくなるといった課題があります。事実、本町のある店の主人に過去の本町について伺ったところ、閉じた店が多く、昔はもっと活気があったという話をされました。地方における若者の減少というのは日本全体で起きている大きな課題であり、それが本町で色濃く出つつあるのです。

◇ 私たちの感想

私たちはフィールドワークで本町通りを訪ねましたが、どの店も魅力に溢れていて、本町の人々も快くインタビューに応じて下さったり、とても優しい人達でした。そのような町が若者の減少によって寂しくなってしまうというのは非常に悲しく思います。私たちのようなこれから社会にでる者にとって摩天楼が立ち並ぶような大きな都市は非常に魅力的に映っているとおもいます。しかし、一度自分たちが住んでいる地元を目を向けてはどうでしょうか。日常生活では見えてこなかったことが分かり地元への印象が変わるかもしれません。



SDGsのロゴより

今回は、2年6組7班による名古屋港水族館フィールドワークの報告します。

◇名古屋港水族館を訪問し、サンゴ礁について学びました！

日 時： 2018 年 8 月 22 日(日) 10:00～12:00

訪問先： 名古屋港水族館

内 容： サンゴ礁について学んだ。

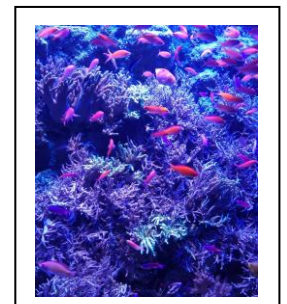
参加者： 久留諒子 森美月 松田有央

◇サンゴ礁について

サンゴはクラゲ、イソギンチャクと同じ腔腸動物の仲間です。タンパク質でできている身体のまわりに、褐虫藻という、藻類をまとわせています。

サンゴは二酸化炭素を取り込み、酸素を作り出す働きを持っています。サンゴが死んでしまうと、酸素が作り出せなくなり、海の中の生物に十分な酸素がいきわたらなくなり、ほかの海洋生物も死んでしまう可能性があります。突発的に一部の海洋生物が死んでしまえば、生態系が一気にバランスを崩してしまいます。サンゴ礁は生物多様性が優れた場所であり、サンゴ礁が失われることは、生物多様性が失われることを意味します。サンゴ礁が失われると、観光資源と、漁業資源がなくなり、経済的に大きなダメージとなります。

今のサンゴ礁の現状は、沖縄の国内最大サンゴ礁の97%が白化し、56%が死滅しています。サンゴ礁の白化は、一言でいうと、海の砂漠化です。サンゴから褐虫藻が抜け出し、サンゴの骨格が透けて白く見える現象です。短期間なら、もとの状態に、回復しますが、長時間続くと、サンゴは死んでしまいます。



◇ 私たちの感想

私たちは海を汚さないようにすることが大切だと考えました。海は思った以上に繊細です。海は広いから少しくらい汚してもいいという気持ちがどんどん海を汚していきます。結果、サンゴに悪影響を与え、海の生き物にも影響してしまいます。ここで私たちにできることは、まずは身近なことから気を付けることです。家からでるごみは、下水管を通して、海に流れます。だから食べ物の無駄遣いや食べ残しなどもうつたないことをしないようにすることで、家庭ごみが減り、少しでも海を守ることにつながると思います。また、直接海につながるような砂浜などのポイ捨てもあたりまえなことだけどもってはいけないことだと思います。今まで意識していなかったけれど海の中にはたくさんのごみがあることは知っていると思います。その個体のままのごみはきっと一番近くでサンゴを苦しめていると思います。海に遊びに行った時のごみはちゃんと持ち帰るべきです。

また、地球温暖化による水温変化で、サンゴの中にいる褐虫藻が死んでしまいます。地球温暖化防止のために身近なところから節電することが大切だとも思います。例えば、冷房の設定温度を上げたり、使っていない部屋の電気を消すなど、簡単なことから意識していくべきだと思います。



SDGsのロゴより

今回は、2年6組8班による関市役所フィールドワークの報告します。

◇関市役所を訪問し、貧困について学びました！

日 時： 2018 年 8 月 6 日(土) 10:00～11:00

訪問先： 関市役所 福祉政策課

内 容： 関市の貧困問題について

参加者： 掛野彩雅 清水葵衣 林美和 村井里緒

◇貧困に対する関市の活動



関市は貧困に対する活動を行っています。この活動の目的は自立した生活を送ることができるように支援することです。市役所は長期間物資の支援などを続けるのではなく、職探しの手伝いなどが大きな役割だそうです。

関市には「関市生活支援相談室」というサービスがあり「働きたくても働けない」「住むところがない」など、困っていることを相談すると市役所の方が一緒に問題解決に向

けて動いて下さいます。

生活保護についても説明して下さいました。生活保護とは、日本国憲法第25条の「すべての国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」という理念に基づき、生活に困っている人に最低限度の生活を保障するとともに、その人が自分の力で生活していけるよう支援することを目的とした制度です。色々な事情で生活が苦しくなりどうしようもない場合には福祉事務所に相談すると、適切な対処をして下さいます。

◇ 私たちの感想

「貧困」には明確な定義がないため、調べる手段がなく研究が思うように進みませんでした。また、世界に焦点を向けるのか、日本に焦点を向けるのか、さらに絞って自分たちの住む関市に焦点を向けるのか悩みました。調べていくうちに、身近な場所でも貧困問題があることを知って、他人事ではないと改めて感じ、より深く知りたいと思ったので、市役所を訪ねようと思いました。

実際に市役所に行って、自分たちの想像以上に貧困に悩む方が多くいて、関市でも貧困問題に対する活動が多くなされていて驚きました。どれだけ自分たちが無知だったのか痛感させられました。シングルマザーや身体障がいのある方も、生活保護の対象者であることを知り、自分たちが生きていく上で、将来的に生活保護を受ける立場にならないとは、絶対に言い切れないと強く感じました。

この活動を通して、今私たちにできることは、市や国の貧困に対する活動により多くの人に関心を持ってもらえるように、まずは身近なところから情報発信を行っていきたいと思いました。



SDGsのロゴより